

多賀の国の物語 6

# 多賀の戦国

## 多賀大社に帰依した戦国武将達

足利尊氏



佐々木道譽



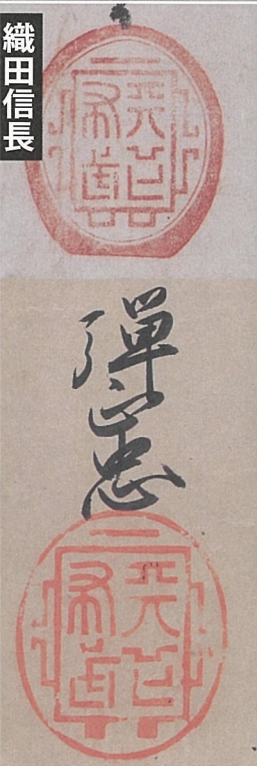
佐々木定頼



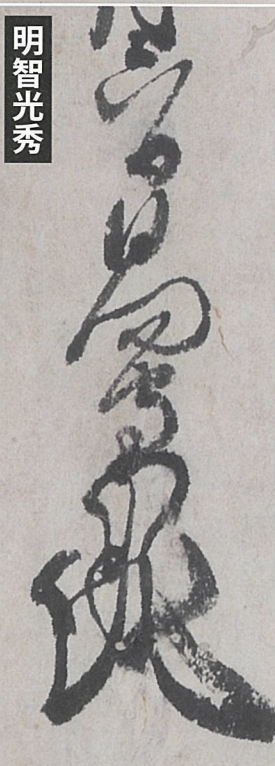
佐々木承禎



織田信長



明智光秀



長命長寿を司る多賀大社の神  
長命長寿とは戦国武将にとって、  
戦を勝ち抜き生き続ける事を意味します。  
このため、多賀大社は武家達は  
多賀の神の神威に頼りました。  
武家達が多賀大社に発給した多くの文書が、  
戦国の時代を武家たちの想いを  
今に伝えています。

武田晴信



浅井長政



豊臣秀吉



徳川家康



# 佐々木道譽

## 婆娑羅大名の神

佐々木道譽は鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての武将で、足利尊氏に協力し、鎌倉幕府を倒し、室町幕府創設した立役者として活躍しました。道譽は法名で実名は高氏。足利尊氏と同音の名で馬が合ったともいわれています。道譽は近江だけでなく若狭・出雲・上総・飛騨・摂津守護を兼ね、京極氏の全盛期を造り出し、財力と武力を背景とした奔放な行動から、婆娑羅大名として広く知られています。道譽の本拠は、甲良町の勝楽寺で、その背後の多賀町にもつながる勝楽寺山に詰めの城を構えたとされています。勝楽寺と多賀大社は距離的にも近く、残された書状から道譽は、多賀大社を崇敬するとともに、その活動を保護していた様子を窺い知ることができます。



勝楽寺にある道譽の墓



観音寺城御館石垣

# 佐々木義賢(承禎)

## 六角氏が縄った近江の神

佐々木氏は宇多天皇を祖とする名家で、鎌倉幕府樹立の立役者である定綱が近江に入り、後に六角・京極・大原・高島の四家に分立し近江を支配します。この内、六角氏は江南に勢力を持ち、織山に観音寺城を構え近江半国守護として権勢を振るいますが、代々多賀大社を厚く崇敬し、多くの文書を残しています。

佐々木(六角)義賢は、十五代の当主で、一時、京にまでその影響力を発揮しましたが、永禄三年(1560)年に江北の浅井賢政(後に長政)との戦いに敗れるとその勢力を弱め、さらに、永禄十一年(1568)に織田信長が近江に侵攻するとこの戦いにも敗れます。しかし、以後、信長に対しゲリラ戦を展開し、信長を長く苦しめます。

# 武田晴信(信玄)

## あこがれの地近江に居ます神

天文十四年(1545)近江から遠く離れた甲斐の武田晴信(後の武田信玄)は二十五歳の厄年に当たり、厄除けの祈願を黄金二枚を添えて多賀大社に依頼しています。

甲斐の覇権を確立すると信玄は西に向かって侵攻を開始し、元龜三年(1572)三方ヶ原の合戦で織田信長の遠征軍を撃破し、美濃に迫ります。このまま信長の本体を破れば近江は目前。念願の多賀大社への参詣も叶ったはずですが、翌元龜四年、信玄は陣中で病没してしまいます。「我が軍旗を勢田橋に掲げよ!」という信玄の望みはここに潰えます。反対に織田信長はこの信玄の死により息を吹き返し、将軍義昭、そして宿敵浅井長政との戦いに力を傾注し、近江支配と、天下布武への歩みを早めることになります。



勢田橋



安土城大手道



安土城唯一の遺構：超光寺表門（東近江市）

# 織田信長

## 天下布武への思いを託す神

永禄十一年(1568)織田信長は足利義昭を擁して上洛戦を敢行します。当然のことながら近江の佐々木義賢が護る観音寺城を突破しなければならず、ここに戦闘が勃発します。近江に侵攻した信長は、多賀大社の門前ともいえる高宮に陣を置き、観音寺城との戦いに備えます。この緊迫した情勢の元、信長は多賀大社を保護するための禁制文書をいち早く発給しています。信長もまた多賀大社を厚く崇敬していました。

永禄五年(1562)、六角氏を圧倒した浅井長政は、多賀大社の直ぐ近くの久徳城を攻め、これに味方した、是も多賀大社に隣接する敏満寺を攻めます。さらに元亀三年(1572)信長は、長政の攻撃により力をそがれた敏満寺を攻撃し、これを壊滅させます。攻撃の理由は、敏満寺が延暦寺に味方し、信長に対する協力の要請を拒否したためとされています。

多賀大社に接するようであった久徳城・敏満寺は長政と信長の攻撃により壊滅しましたが、多賀大社は攻撃されていません。多賀大社が中立を保ったためと考えられますが、長政も、信長も多賀大社を崇敬しており、そのことが攻撃を思いとどまらせたとも考えられます。信長の社寺の攻撃は決して闇雲になされたものではないことを、物語っています。

# 明智光秀

## 古き好身の神

天正十年(1582)、明智光秀は織田信長を本能寺で倒し、直ちに安土城を目指しますが、勢田橋を護っていた山岡景隆が、橋を落とし退去したため、安土城への入城が三日間遅れてしまいます。この三日のロスが、光秀のその後の運命を狂わすこととなります。

さて、光秀は安土城に入ると長浜城と佐和山城に軍勢を差し向け、これを接收するとともに、多賀大社に対して禁制文書を発給し、多賀大社を保護します。

この背景には、近江の地誌である『淡海温故録』に記載された「光秀多賀出生説(詳しくは多賀の国の物語5をご覧ください)」との関係が語られます。これによると、本能寺の変を起こした光秀は多賀の「古き好身(よしみ)に対し、味方を募ったところ、久徳六左衛門、多賀新左衛門が同心した。」と記されています。両名とも多賀に本拠を持つ地侍です。

『淡海温故録』の信頼性には問題がありそうですが、いち早い多賀大社への保護、多賀の地侍達の光秀への結集は事実です。これらの事実は、明智光秀の多賀出生説を肯定する根拠ともなりそうです。



佐目十兵衛屋敷



明智一族の墓(大津市 西教寺)

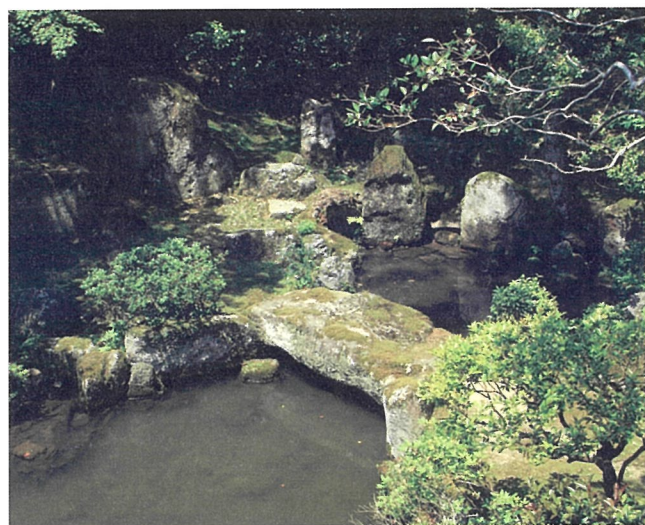
# 浅井長政(猿夜叉・賢政)

## 幼少から晩年まで支え続けた神

浅井氏は、北近江半国守護であった京極氏を圧倒し、小谷城に本拠を移し、南近江の六角氏との抗争を繰り広げます。しかし、浅井亮政・久政の段階では六角氏に圧倒され続けていました。こうした中で生まれた浅井長政は、家臣団の期待を一身に集め成長します。その家臣団の想いが多賀大社に寄進された梵鐘に記された、長政の幼名「猿夜叉」に込められています。しかし、長政の少年時代はやはり六角氏の勢力下であり、六角義賢の策謀により六角家臣の娘と政略結婚させられ、その名を「賢政」に改めます。賢は義賢の賢です。しかし、永禄三年賢政は彦根の野良田合戦で六角を始めて破り、江北の覇権を確立すると、名を「長政」に改めます。長は、新たに同盟を結んだ織田信長の長です。



猿夜叉の銘が記された梵鐘(多賀大社提供)



多賀大社奥書院庭園

# 豊臣秀吉

## 母の長命を託した神

多賀大社は、長命長寿を司る神様として熱い崇敬を集め続けています。その中で豊臣秀吉の母の長命への祈願はとりわけ心を打ちます。天正十六年(1588)、秀吉は母の病氣平癒を祈り、多賀大社に米一万石を寄進しています。その祈願文の中には「多賀の神様、母の寿命をあと三年延ばしてほしい。それが無理なら二年でもよい、いや、それも無理ならば三十日でもよいから延命させてほしい」と書いています。この秀吉の祈りが通じ、母は五年の延命を得ることができました。

この時の秀吉からの一万石の寄進により作られたのが奥書院、そしてその前に造られた庭園です。

# 徳川家康

## 子孫繁栄と家の安寧を託す神

豊臣氏から政権を奪った徳川家康もまた、多賀大社を厚く崇敬し数多くの文書を残しています。家康の多賀大社への信仰は秀忠・家光にも受け継がれ、二代将軍秀忠は多賀大社に対し社領三百五十石を安堵するとともに、井伊家に命じさらに百五十石を追加し、大社の運営を支えました。秀忠自身の病に際しては、春日局を代参させ、その平癒を祈願しています。この際に、彦根藩の手により、中仙道から多賀大社へ至る道が整備され、起点となる高宮に大鳥居が建立されました。三代家光は、多賀大社の本殿の再興に尽力しています。

元和偃武を経た太平の世になると、家を継ぐことが武家の最大関心事となり、この事が長命長寿を司る多賀大社の神徳と合致し、江戸幕府、井伊家の信仰と結びついたのでしょう。



徳川幕府による多賀大社造営の際に寄進された大釜